

# 沖繩からの風1

2010.8.28 姫路

真喜志好一さん

沖繩には今、自然を破壊する二つの基地建設計画がある。

一つはサンゴ礁の海を破壊する名護市辺野古の海上基地建設計画。もう一つは亜熱帯の森東村高江のヘリパッド建設計画。この二つの計画は、沖繩の人々の基地負担の軽減ではなく、米軍の基地機能の強化のために立案されたものである。

辺野古と高江に米軍基地を作らせないという住民に正義があるのか、日米両政府に正義があるのか、考える材料にしてくださいと思います。

1996年普天間の返還を日米間で合意したが、沖繩島の東海岸への移設条件付であった。(本来普天間基地とは、アメリカの占領下民家や畑を破壊し、住民から奪ってできたもので、無条件での返還を求めるべきだ。)

これに対し名



護市住民は建設の是非を問う住民投票の準備を始めた。ところが最初に日本政府が介入した。

最初の介入が、防衛庁長官が「賛成票獲得に協力を」と沖繩駐留の自衛官ら5500人に文書で要請したのだった第二の介入が、那覇防衛施設局の全職員440人の内、200人を名護市内に宿泊させ、「海上基地は安全だ」、「振興策につながる」とのパンフレットを名護市内の全戸に配布させたのだ。

にもかかわらず、住民投票では過半数の反対があり、住民の意思ははっきりした。しかし、日米両政府は、名護市民の意思を無視し、移設計画を進めてきた。

いま、名護市の東海岸にある辺野古(へのこ)では、2004年4月19日未明に那覇防衛施設局が海底の地質を調べるボーリング調査に現れて以来、漁港の近くでテント村を構えている。この調査は正式な手続きを経ている。「国が法律を犯して調査を強行するのであれば、住民は非暴力直接行動で国の違法行為を止める権利がある」との立場を貫き、04年9月9日から始まった海上での調査には、陸上での座り込み、小型船での調査阻止行動に加えて、10艘ほどのカヌーや素もぐりで対抗した。

普天間は危険で、移転は沖繩県民の要求だから辺野古移転が必要という説明がされているが実際は違う。

1995年の少女暴行事件を機に「基地の整理縮小」、「日米地位協定見直し」の声が強まり、8万5千人の県民大会が開かれた。日米両政府の間に、その声を受けて「沖繩に関する特別行動委員会

( the Special Action Committee on Okinawa

略してSACO)が立ち上げられた。

翌年には最終報告(SACO合意)で移設条件付の普天間飛行場

など11の基地の返還が発表された。

このあまりの速さに、その裏の意を詠む調査を始めたのは1997年沖繩県立公文書館が米国から取り寄せた膨大な文書を点検分析するという作業を経て、私たちは次の結論に至った。SACO合意とは、基地を返還すると見せかけて、実は米軍基地を「統合・強化・近代化」する計画だ、ということである。

辺野古の計画は、1966年の軍の計画に酷似している。(続)

## 普天間基地

1945年…沖繩は戦場にされた。戦没者数  
県民12万2千228人、本土兵士6万5千908人、米軍人1万2千500人。

その占領下住民を収容所に入れている間に、民家、村役場、小学校などをつぶし、畑も墓もブルドーザーでかきならし、生活の場を奪って作った。敗戦後、収容所からの移動が許可された住民は、金網の周辺に住むか、新たに割り当てられた住居地に住むしかなかった。世界一危険な飛行場と言われる。所在地である宜野湾市の33%を占める。